

# ワーグナー資料の収集家 メアリー・バレルとバレル・コレクション

小林幸子

## 一・バレル・コレクションへの形成

リヒャルト・ワーグナー Richard Wagner (1813-1883) に  
関連する一次資料は、世界中に点在するが、その多くはドイツ・  
バイロイトのリヒャルト・ワーグナー財団文書館 Das  
Nationalarchiv der Richard-Wagner-Stiftung Bayreuth に所  
蔵される。同館の資料を管理する分類記号のひとつには  
「Burrell Lot」という記号があり、これはあるアイルランド生  
まれの女性の名前に由来するものである。

当稿は、後世のワーグナー研究において重要な役割を果たすことにな  
ったこの女性と、彼女が生涯をかけて行つたワーグナ  
ー関連資料の収集、そして、それをもとに彼女が執筆したワー  
グナーの伝記について明らかにするものである。

バレルの父親であるサー・ジョン・バンクス Sir John Banks はダブリン・トリニティ・カレッジの医学部欽定講座  
担当の教授で医者、そして夫のウイロビー・バレル男爵 Hon.

Willoughby Burrell はバレルの死後、ある土地の領主となつた人物である<sup>(1)</sup>。このような恵まれた環境が、バレルの収集活動を可能にしたと言えるだろう。

ワーグナー家に特別な縁もなく、むしろコジマを初めとするバイロイト・サークルに嫌悪感さえ抱いていたバレルは、いかにして数多くの貴重な一次資料を収集したのか。基本となるのは、ワーグナーの周辺人物への綿密なアプローチである。バレルは、ドイツ語も堪能だたと言われている。

一八九〇年に、バレルはワーグナーの先妻ミンナ Minna (1809-1866) がワーグナーと出会う前に出産した娘であるナターリエ・ビルツ Natalie Biltz (1826-1892)<sup>(2)</sup> と接触している。ミンナが一八六六年一月二十五日に亡くなつた後に、ワーグナーはナターリエに対して、ワーグナーがミンナに送った書簡の返却を二度にわたつて求めた。

この後、ナターリエは保管していた書簡のうちの三分の二ほどをワーグナーに渡したが、一八四二年以前にワーグナーからミンナへ送られたものと、その後に書かれた書簡の中でも重要なと思われるものは手元に残していた<sup>(5)</sup>。バレルは、こうしてナターリエがワーグナーに渡さずに保管していたミンナ宛ての一二八通の書簡や、ミンナによって開封された、チューリヒ亡命時のパトロンの妻マティルド・ヴェーゼンドンク Mathilde Wesendonck (1828-1902) 宛てのワーグナーの書簡<sup>(6)</sup>、ワーグナーの自筆原稿といった大量の資料を、一八九〇年に購入した。ナターリエとバレルは、コジマへの不信感という点で利害が一致しており、そうしたことでもワーグナー資料の譲渡に功を奏したと言えるだろう。こうしてナターリエから入手した資料が、バレル・コレクションの中核を成しているのである<sup>(5)</sup>。

バレルの資料収集の熱心さは、これだけにとどまらない。コジマの口述筆記によるワーグナーの自伝『わが生涯 Mein Leben』の初版は、一八七〇年から一八八〇年までの間に全四

い。それらの手紙には何をすることも許されない。……しかし、ミンナが保管していたのなら、それらは必ず送り主に返却されなければならない。もしミンナが手紙を譲渡したのであれば、私はその不法行為に対しても法的手段に出るだろう。(一八六八年十一月二十七日、ルツエルンのワーグナーよりナターリエ宛て書簡)<sup>(4)</sup>

ところで、私のミンナへの手紙を本当に返却してもらいた

139

卷に分けて印刷された。各巻は私家版として一五～一八部發行され、ワーグナーにとって當時、最大のパトロンであった

バイエルン国王のルートヴィヒ二世 Ludwig II (1845-1886) やコジマの父である作曲家のフランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) など、いく親しい人たちにのみ贈られた。第一巻から三巻までは、フリードリヒ・ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844-1900) が校正にあたった。それにも関わらず、この私家版はコジマの悪筆により誤植が多数、生じており、文脈が変わってしまっている部分も多いところ。一八八三年のワーグナーの死後、コジマは配布したこの版を回収し、それらのほとんどを処分した。

やがてワーグナーは、印刷業者に対して原稿が外部に漏れぬよう、試し刷りなども残らず破棄するように厳重に指示していた。

修正した校正刷りを同封します。……我々の結んだ契約では、校正刷りも、印刷も、世間に漏れないようあなたが厳密に注意することがすべてです。(一八七〇年七月七日、ルツェルンのワーグナーよりバーゼルの印刷業者 G. A. ピンファンティーニ宛て書簡)<sup>(8)</sup>

それでも関わらず、バレルはこの伝記の校正刷り入手している。この印刷業者は、校正刷りの一部を手元に残していたの

である。バレルは、これを一八九二年に印刷業者の未亡人から譲り受けた。

バレルは、この他にもワーグナーの姉オットティーリエ Otilie (1811-1883) や妹ツェツィーリエ Cäcilie (1815-1893)、それに姉ロザーリエ Rosalie (1803-1837) の娘、ワーグナーと親しかつた人物の家族などとも接触し、資料や情報の収集に努めた。しかもしてバレルによって集められたワーグナー関連資料は、「バレル・コレクション Burrell Collection (Burrell Summlung)」と呼ばれている。つまり、バレルはワーグナー研究の先駆けとも言える人物なのである。

## II. パレクションの行方

一八九八年、バレルはワーグナーの伝記完成の志半ばにして他界した。その後、コレクションは長らくイギリスにあるバレルの娘ヘニッカーヒートン Lady Henniker-Heaton の家に人知れず眠つていたが、一九二九年によへやへ発見された。それに伴い、ピーター・E・ライト Peter E. Write がカタログ『Catalogue of the Burrell collection of Wagner: Documents, letters, and other biographical material』(London; 1929) を編纂し、コレクションは売りに出された。

初めは、当時の評価額として \$1,250,000 の値が付けられたが、結局は \$250,000 に下がつた。フィラデルフィアの書店が

これに目を付け、その手引きによつてカーティス音楽院（フィラデルフィア）の設立者メアリー・ルイーズ・カーティス・ボク Mary Louise Curtis Bok (1876-1970) が一九三〇年に同コレクションを購入した。そして、一九四四年にコレクションはカーティス音楽院へ寄贈された。

その後、コレクションの大部を占める書簡をジョン・N・バーク John N. Burk が編纂し、一九五〇年に書簡集『Letters of Richard Wagner: The Burrell Collection』(New York;

1950 / 1972) を出版した。これは六〇〇ページを越える大著である。本体となる部分では年代を追つて二十四章に章立てされており、それぞれの時代に書かれた書簡の引用に基づき、その背景が伝記的に説明されている。巻末の書簡リストにも丁寧な説明が施され、単なる書簡集というよりは伝記のような体裁をとっている。

*Mary Burrell* (New York; 1978) には、バレルが執筆したワーグナーの未完の伝記を筆頭に、ワーグナーやその周辺人物同士による手紙、初期ピアノ作品やオペラの自筆楽譜、台本そしてポートレートやワーグナーが使用した指揮棒などが掲載されている(表1)。これらを購入したバイロイトのリヒャルト・ワーグナー財団文書館では、同カタログでの資料ナンバーをそのまま「Burrell Lot」という分類記号に付して、取得した資料を管理している。

一九七一年十一月には、バレル・コレクションの一部がニューヨークの個人所有者より同財団に寄贈されたことが発表になった<sup>(9)</sup>。その発表によれば、寄贈された資料は全四二点、特に一八九〇年代にバレルに宛てられた手紙が大部分を占めている。その多くはナターリエが書いたもので、この他にはワーグナーの姪ヨハンナ・ヤッハマン=ワーグナー Johanna Jachmann-Wagner (1826-1894)<sup>(10)</sup>、ワーグナーの姉クララ Klara (1807-1875) やオットマールによる書簡が各一通、ナターリエの出生証明書や写真、一八三九年にワーグナーと共にリガから脱出した際のナターリエによる記録、一八四一年のワーグナーのパリでの住居のスケッチ、ワーグナーとその妹ツェティーリエとの関係を示す記録<sup>(11)</sup>、それにバレルの手帳などが含まれているという。

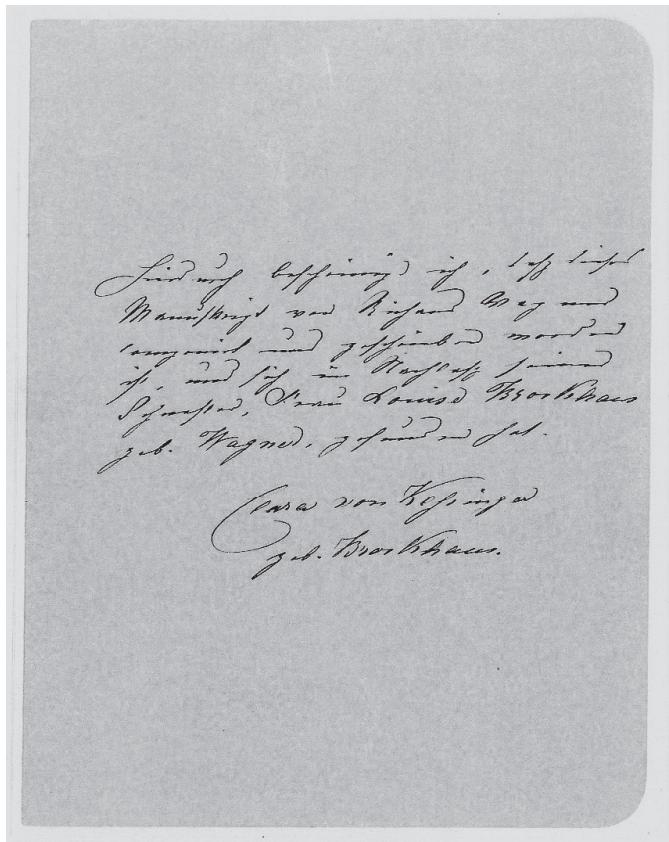
また、明治学院大学図書館に所蔵されている、ワーグナーが十代の頃に作曲した《ピアノ独奏のためのボロネーズ》ニ長

出品された(一九七八年十月二十七日)。そのカタログ『The Richard Wagner Collection formed by The Honourable Mrs.

(表1) クリストイーズ・オークション・カタログ  
*[The Richard Wagner Collection formed by The Honourable Mrs. Mary Burrell]  
(1978) に掲載されている出品物*

Lot No.	作者	内容
1, 2	メアリー・パレル	ワーグナーの伝記『Richard Wagner : His Life & Works from 1813 to 1834』
3	メアリー・パレル	『Preface to the Love Letters』というタイトルのワーグナーの伝記の草稿ほか
4	ナターリエ・ブランー	パレル宛書簡(1890-99年、ライスニヒ、全21通、内1通はパレルの娘宛)
5	SCHMOLE, Maria (演出家フェルディナント・ハイネの娘)	ワーグナーの回想録(5冊)、パレル宛書簡(6通) : 1895-96年
6	ルートヴィヒ・ガイアー	ヨハンナ・ロジーナ宛書簡(1814年1月14日、ドレスデン)ほか
7	KRAUSE, Carl	『Der Aufruhr in Dresden am 3 [bis] 9 Mai 1849, nach amtlichen Quellen, Zweite Auflage, Dresden 1849』ほか
8	PECHT, Friedrich (ワーグナーの友人)	『Aus Richard Wagners Pariser Zeit』の自筆原稿(1883)ほか
9		ゲヴァントハウスでの公演プログラム(1832-34)ほか
書簡		
10~73	リヒャルト・ワーグナー	書簡(Lot.73はワーグナーの手によるものか疑わしい詩)
74~76	ミンナ・ワーグナー	書簡(Lot.76は様々な人からのミンナ宛書簡)
77	FROMMANN, Alwine (ワーグナーとミンナの友人)	ミンナ宛書簡(11通)
78	ナターリエ・ブランー	ミンナ宛書簡(3通)
79	ツェツィーリエ・アヴェナリウス	ワーグナー宛書簡(1852年1月7日、ベルリン)
80	コジマ・フォン・ビューロー	ミンナ宛書簡(2通)ほか
81, 82	ハンス・フォン・ビューロー	ワーグナー宛書簡(1855年12月24日、ベルリン; 1860年11月11日、ベルリン)
83	ハンス・フォン・ビューロー	フランスの音楽誌編集者宛ほか書簡
84	ジェシー・ローン	ミンナ宛書簡(1850年4月7日付、ボルドー)ほか
85	フランス・リスト	自身の秘書宛書簡(1840年代初頭の8月18日、コブレンツ)
86	フランス・リスト	ミンナ宛書簡(1849年7月27日、ヴァイマル)
87	SCHINDELMEISSER, Ludwig (ダルムシュタットの劇場の音楽監督)	パリのワーグナー宛書簡(1860年10月18日、ダルムシュタット)ほか
88	ガスバーレ・スピントニー	ワーグナー宛書簡(1844年11月2日、ベルリン)
89	オットー・ヴェーゼンドンク	ロンドンのワーグナー宛書簡(1855年5月19日、チューリヒ)ほか
自筆原稿		
90-112	リヒャルト・ワーグナー	自筆譜、自筆原稿
印刷作品		
113	ガエターノ・ドニゼッティ	『ラ・ファヴォリタ』ワーグナーによるピアノ編曲版出版譜ほか
114-126	リヒャルト・ワーグナー	印刷譜ほか
その他		
127		ヴェネツィアのゴンドラのミニチュア(ワーグナーがミンナの1858年の誕生日に贈ったもの)
128		ワーグナーとミンナの結婚式の案内チラシ
129		ミンナとナターリエの写真(1859)ほか
130		ワーグナーの指揮棒ほか
131		ワーグナーのシルエットによる肖像画(1835)
132	STOCKER-ESCHER, Cremantine	ワーグナーの肖像画(1853年4月頃)ほか
133		ワーグナーの写真(1861年、パリ)
134	エルнст・ベネディクト・キーツ	ワーグナーのカリカチュア
135	エルнст・ベネディクト・キーツ	ワーグナーの銅版写真(1850)
136	エルнст・ベネディクト・キーツ	ワーグナーとミンナのカリカチュア(1841年、パリ)ほか
137	グスタフ・キーツ	テオドール・ウーリヒの石膏メダル(1853年)
138		ミンナの肖像画
139		パレル18歳時の肖像画(1868年頃)

(資料1) クララ・フォン・ケッシンガーによる、ワーグナー作曲《ピアノ独奏のためのポロネーズ 二長調 Polonaise in D-Dur zu zwei Händen》WWV23A 自筆譜の証明書(明治学院大学図書館所蔵)



調 Polonaise in D-Dur zu zwei Händen》WWV23A の自筆譜も、バレル・コレクションに由来するとやれてくる<sup>13</sup>。同コレクションを経てマンチェスターで個人所有となり<sup>13</sup>、その後、一九九四年にザザビーズに出品され、これを日本の古書店

が購入、1100五年に明治学院大学図書館の所蔵となった。この自筆譜には、「Hierdurch bescheinig' ich, dass dieses / Manuskript von Richard Wagner componiert / und geschrieben worden / ist, und sich im Besitz seiner

/ Schwester, Frau Louise

Brockhaus / geb. Wagner,

gefunden hat. / Clara von

Kessinger / geb. Brockhaus

この書面において、私は以下のことを証する。」の手稿譜は、リュ

ヤルト・ワーグナーによって作曲

され、書かれたものである。そし

て彼の姉ルイーゼ・プロックハウ

ス(旧姓ワーゲナー)の所有財産

の中から発見されたものである。

クララ・フォン・ケッシンガー(旧姓プロックハウス)と書かれた、

ワーグナーの上から「番目の姉ル

イーゼ Luise (1805-1872) の三

番目の娘(すなわちワーグナーの姪)、クララ・フォン・ケッシン

ガー Clara von Kessinger による

証明書が添付されている(資料1)。

### 三・未完の伝記

前述のとおり、バレルは執筆を続けていた伝記の完成を見るところなく、一八九八年にこの世を去った。執筆中の伝記は、ワーグナーの二十一歳の時点まで記されており、同年、夫と娘によつて『Richard Wagner: His Life & Works from 1813 to

1834, Compiled from original Letters, Manuscripts & other Documents by Mrs Burrell née Banks and Illustrated with Portraits & Facsimiles』(London 1898 / Thalwil 2001) といふタイトルで百部出版された。一〇〇一年には、チューリヒ中央図書館により復刻版が出版されている<sup>[4]</sup>。

伝記全体の構成としては、まず特に章立てなどとの区分けはない。ほぼ時系列に沿つた記述はあるが、内容との見出しありなく延々と綴られている。ワーグナーは一八一三年、ナポレオン率いるフランス軍占領下のライプツィヒに生まれたため、ワーグナー伝記はナポレオン戦争の記述から始まるのが定型であるが、このバレルによる伝記も例外ではない。しかし、全体を通して見ると、著者の主張が色濃く表されているのがわかる。例えば、次のようにバレル自身の個人的な体験や意思、追跡調査の過程が随所に挿入されているのである。

私は初めてバイロイトを訪れた際、六七三と番号が付けられた家に宿泊した……これは、バイロイトで六七三番目に

建てられた家なのである。ところが一八八九年に私がバイロイトを訪れた際には、こうした村での昔ながらの番号付けが、通りへの番号付けへと変化していた。旅行者のための宿泊施設が乱立したためである。これは、私の愛するバイロイトをだめにする破滅的な繁栄の一部だと感じたのだつた。<sup>[5]</sup>

伝記は、ワーグナーの父方の四世代前にまで遡っている。ドイツ北部の町キューレンで二十二年もの間、校長を務めていたという高祖父エマニュエル・ワーグナー Emanuel Wagner (1664-1726) から始まり、ライプツィヒに程近いミュードレンツで同じく校長を務めていたという曾祖父ザムエル・ワーグナー Samuel Wagner (1703-1750)、祖父ヨハトロープ・フリードリヒ・ワーグナー Gottlob Friedrich Wagner (1736-1795)、そして父カール・フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ワーグナー Carl Friedrich Wilhelm Wagner (1770-1813)、母ヨハンナ・ロジーネ Johanna Rosine (1774-1848)、一人目の父ルートヴィヒ・ガイアー Ludwig Geyer (1779-1821) と続く。これらの人々の情報は、各々の洗礼、婚姻、死亡などの各証明書を転載して、その根拠としている。

その後も、ワーグナーの姉たちに関する細かな記載、そしてガイアーが一八一六年の妻の誕生日のために書いたといふ一家の子供たち(ワーグナー、二人の兄、四人の姉、それ

に妹）がキヤスティングされている四場構成の劇『驚き Die Überraschung』の台本や、ガイアーガーがワーグナーの長兄アルベルト Albert (1799-1874) に送った何通もの書簡の転載など、ワーグナーの家族の情報が非常に豊富である。このため、ワーグナー自身に焦点を当てた記述が始まるのは、本文全一二九ページ中、半分以上過ぎてからのことである。ここには、ワーグナーの通った学校の記録書類や、ワーグナー作品が演奏された演奏会のチラシなどが転写され、二十一歳までの様子が描かれている。

最後には、次のような書き手不明の後書きが添えられている。

恐らくは、いつかある日に、彼女がこの仕事のために用意した重要で興味深いコレクションは……公衆に開かれることだろう。しかし、今はマティソンによる天に眠る者たちへの純粹で美しい言葉で、この本を締めくくるしよう。

「苦痛と迷いから解放され、君は安らかに眠る Von Schmerz und Wahn geschieden / Du schläfst in Ruh」<sup>(16)</sup>

おわりに

バレルは、その執念とも言える力でワーグナーに関する資料を収集した。そのおかげで、特に失われがちな初期の書簡や自筆原稿などの一次資料の散逸はかなりの部分で免れることが

きたであろう。さらに、コレクションには初期作品のみならず、『リエンツイ』、『さよよえるオランダ人』、『タンホイザー』、『ローエンゲリン』、そして『ニユルンベルクのマイスター』など、重要な作品の手稿資料も含まれており、そうした点においてもバレルは後世のワーグナー研究に大きな功績を残したと言える。

一方で、バレルの執筆した伝記は明らかに異色である。歴史記述に書き手の意思が少なからず介在するのは必然であり、それでも執筆者たちは可能な限りそれを覆い隠そうとするものが、バレルによる伝記は思い入れの強さのあまり主観が前面に押し出され、執筆者の一人称で埋め尽くされている。そして、ワーグナーとその祖先や家族（コジマ以前）への畏敬、そしてコジマ以降に対する批判をどこか感じさせる内容であることは否めない。

このため、その内容を歴史史料としての価値基準で考えるならば、この伝記は十分な批判的視線を持って読み進めることが必須である。しかし、この伝記の執筆者がワーグナーを取り巻く多くの人物と接触し、膨大な数の一次資料を手にしたことは紛れもない事実である。その前提を考えれば、この伝記がひとつの研究資料として極めて重要性が高いことに間違いはないだろう。

## 註

- (1) Hurn, Philip Dutton and Root, Waverley Lewis, *The Truth about Wagner*, London 1930: 5.
- (2) 旧姓「ラーナー」Planer<sup>o</sup> ワーグナーの自伝『わが生涯』には、「ナターリエは、表向あは『ハナの妹』とベリエになつてしまふが、実際は『ハナの娘である』へふて内容が記されています。
- (3) Wagner, Richard., *Mein Leben*, München 1963[in: Friedrich, Sven ed., *Richard Wagner: Werk, Schriften und Briefe*, München 2004: Directmedia] : 138, 148.
- (4) Burk, John N., *Letters of Richard Wagner: The Burrell Collection*, New York 1950/1972: 428-429.
- The Richard Wagner Collection formed by The Honourable Mrs. Mary Burrell*, Christie, Manson & Woods International Inc., New York 1978: 38.
- Burk 1950/1972, op.cit.: 576-577.
- Christie, Manson & Woods International Inc., New York 1978, op.cit.: 338-339.
- (5) Ibid.: 9.
- (6) チョーリン亡命時の一八五八年四月七日には、ワーグナーが当時のペトロノである実業家のオットー・ヴェーゼンドンク Otto Wesendonck (1815-1896) の妻マティルデ宛てに、前夜のふやかこのお詫びを綴つたもの。マティルデの手に渡る前にマハナが開封。二人の親密さを充分に感じさせる文面であつたために、ワーグナー夫妻がこの四ヶ月後に当時滞在し
- (7) Burk 1950/1972, op.cit.: 1-10.
- (8) Ibid.: 579.
- (9) 110 - 111年十一月二十五日付け、バイロイト・コロナム・ワーグナー博物館ホームページより ([http://www.wagnermuseum.de/news/18/details\\_12.htm](http://www.wagnermuseum.de/news/18/details_12.htm))
- (10) ワーグナーの長兄アルベルトの養女でソプラノ歌手。ワーグナーも自身の演奏会に起用した。(三光、池上他訳『コバマの日記2』2009: 412-413)
- (11) 一時期、ナターリエはハマーハウスの元に寄宿していました。(Burk 1950/1972, op.cit.: 7)
- (12) ノの手稿譜の詳細は、小林幸子『ワーグナー作曲《ピアノ独奏のためのボロネーズ》(長調) WWW23Aの資料批判的研究』(明治学院大学11005年度修士論文)を参照。
- (13) Furness, R.S. and Walker, Arthur D. "A Wagner Polonaise," *The Musical Times*, Vol. 114, No. 1559: 26-27 (1973).
- (14) 该稿における伝記に関する内容は複刻版に依拠す。<sup>o</sup>
- (15) Richard Wagner: His Life & Works from 1813 to 1834, Compiled from original Letters, Manuscripts & other Documents by Mrs Burrell née Banks and Illustrated with Portraits & Facsimiles, London 1898 / Thalwil 2001: 3.
- (16) Ibid: 129.